

令和8年5月26日

美深町議会議長 南 和 博 様

産業教育常任委員会委員長 和 田 健

所 管 事 務 調 査 報 告

本委員会は、下記の事項について閉会中に所管事務調査を行ったので、会議規則第77条の規定により報告する。

記

調 査 日 令和8年4月23日

調査事項 スポーツ行政の現状と課題について

調査内容 ①各スポーツ機関(大学・団体)や広域連携の状況について
②子どもスポーツ文化未来基金の実績について
③エアリアルプロジェクトの今後について

調査方法 聞き取り

調査内容の報告

①各スポーツ機関（大学・団体）や広域連携の状況について

北海道教育大学は平成17年12月、仙台大学は平成19年10月に相互協力協定を締結し事業を進めている。生涯スポーツを通して住民の心と身体健康促進を図るため、当時発足した総合型地域スポーツクラブの育成や、子どもたちの体力向上、健全育成、タレント発掘育成プロジェクトとの連携、エアリアルプロジェクトも同時期に始めた。

協定締結に伴い、多くの大学関係者や学生が来町し、職員との人事交流を含め、スポーツ行政に大きな協力をいただいた。また仙台大学とは健康づくりサポーター養成研修会を開催したが、養成講座の運営において専門的知識や技術の定着、習得を完結させることが難しく、大学側からの継続したサポート人材の確保が必要であるとの課題もあった。

年に数回の来町では、事業としてなかなか定着せず、現在は具体的な事業連携はなくなっているが、定期的に大学を訪問するなど、相互協力ができる場合は動ける体制を維持している。

②子どもスポーツ文化未来基金の実績について

平成25年に基金を創設し、町からの負担金や寄付金をもとに、各競技団体やスポーツ少年団、個人の大会参加料、遠征費、宿泊料に対し基準を決めて交付している。

創設当初は基金保有高と支出のバランスが良かったが、令和2年に新型コロナウイルス感染症の影響で利用が減少し基金保有高が増加したため、町負担金を減額し保有高の調整を図っている。

その後、令和6年には全国大会出場にともなう支出が増大し、前年度対比二倍となったことにより基金保有高が減少したため、令和7年度は交付基準を一部見直して運用を図った。枯渇しそうな基金に令和8年度は町負担金を繰り入れて基金保有高を維持している。

全国大会に出場する団体・個人が増えると支出が大きくなる傾向にあるため新しく基準を改正したが、スポーツ文化未来基金運営委員会の中で、頑張っている子どもたちに柔軟に基金を活用できるよう、保有状況を見ながら運用することとしている。

③エアリアルプロジェクトの今後について

平成17年にエアリアルプロジェクト委員会が発足し、美深町ではトランポリンが盛んであったことから、冬のフリースタイルスキーに種目転向して育成を図るため、アスリート発掘育成を目的に種目団体や教育委員会と連携してプロジェクトを進め、21年が経過した。この間、20年連続でエアリアルの全日本大会を美深スキー場で開催し、「美深町からオリンピック選手を」を合言葉に活動をすすめてきた。

平成30年には平昌冬季オリンピック出場選手の事前合宿を受け入れ、日本人出場選手の他にカナダ・スイス・ベラルーシ・イギリス・ドイツなど6か国の選手が美深町で合宿を行った。

その後、美深町出身でワールドカップに出場する選手も輩出し、2026年には美深エアフォース出身の五十嵐兄妹がミラノ・コルティナ冬季オリンピックに出場を果たし、プロジェクト発足20年以来の念願を達成した。

現在は美深町内の小学生3名と札幌市の子どもたちを育成指導しているが、エアリアル選手の発掘においては、競技人口の増加と練習量を増やすためには夏場の対応が課題となっている。

調査のまとめ

大学との相互協力協定については、地域コミュニティ活性化促進事業などの補助金により、エアリアル、スポーツクラブ、大学生の合宿誘致、指導者の育成、高齢者への健康プログラムなど、多岐にわたり取り組んできており、今後の進展を期待するものである。

現在においては関りが少なくなっている様子が伺える各協定締結大学とは、事務レベルの関係者と交流をし、情報収集することで、地域の課題がどこにあるのかを検証し、新しい活動を模索しながら、さらに部活動の地域移行の進捗も鑑み調整していく必要がある。

こどもスポーツ文化未来基金は、スポーツ活動だけでなく文化活動を追加し、指導者養成研修にも支援することで多面的・総合的に美深町のスポーツ振興と子どもたちのスポーツ・文化活動に対する意欲を後押しできる基金となっている。

現在の基金は町からの負担金が主なものとなっているが、創設当初の趣旨であった子どもたちの未来を応援する寄付金の活用という面では、ふるさと納税による使途指定の寄付金が、子どもスポーツ文化未来基金にどのように振り分けられているのか不明であるため町負担金との区別と、更なる寄付金の確保対策を再考すべきである。

エアリアルプロジェクトでは、発足から20年という歴史の中で念願のオリンピック選手が誕生したことは、これまで関わった全ての関係者の方々に敬意を表するものである。

今後の課題となる選手育成では練習量の確保が重要となっており、出来るだけ早くシーズンインできるよう降雪機の必要性や夏場のトレーニングにウォータージャンプの施設整備を議論し

たが、いずれも諸問題を解決するには至らなかった。

FIS（国際スキー連盟）公式であるエアリアルジャンプ台を有する美深スキー場として、冬季オリンピックの札幌開催に大いに期待するところであり、それによって今後のプロジェクト存続と発展に向けた取り組みに進展があるものと期待するところである。

美深町のスポーツ行政全般において、人口減少と少子化により、指導者の確保やスポーツ少年団では単独での存続が難しいという現状がある。

希薄化している北海道教育大、仙台大学との相互協力協定のほか、JIS(国立科学スポーツセンター)、JOC(日本オリンピック委員会)、SAJ（全日本スキー連盟）など各機関との連携と交流を密にし、より関係を深めていくことで、子どもたちのスポーツ・文化活動の維持と発展のための指導者育成に努力することを望むものである。

美深町子どもスポーツ文化未来基金年度別実績一覧

年度	件数	収 入	支 出	決算額
H28	144	4,623,628	2,943,971	1,679,657
H29	132	5,247,007	2,619,665	2,627,342
H30	141	5,771,732	2,921,532	2,850,200
R元	138	6,039,920	2,259,683	3,780,237
R2	62	6,809,671	690,953	6,118,718
R3	97	7,642,553	1,439,342	6,203,211
R4	166	6,823,261	1,953,658	4,869,603
R5	211	5,952,725	2,456,653	3,496,072
R6	263	6,023,295	4,925,670	1,097,625
R7	261	4,134,610	2,360,443	1,774,167